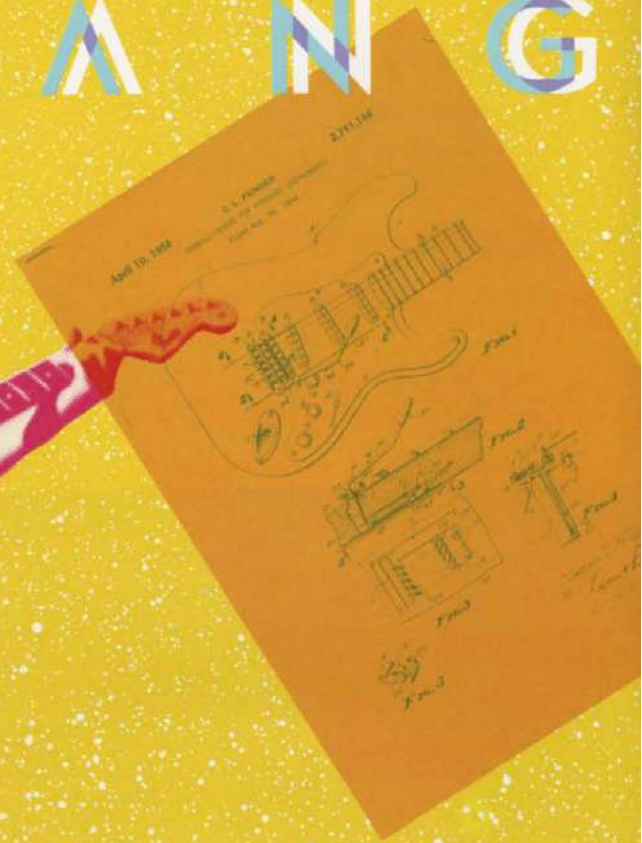


T W A N I N G



ation with
d. micropti-
e. schmers
5. It has
rolled-
success-
spots-
th the
n the
le-
n a

STRONG

RELIABLE

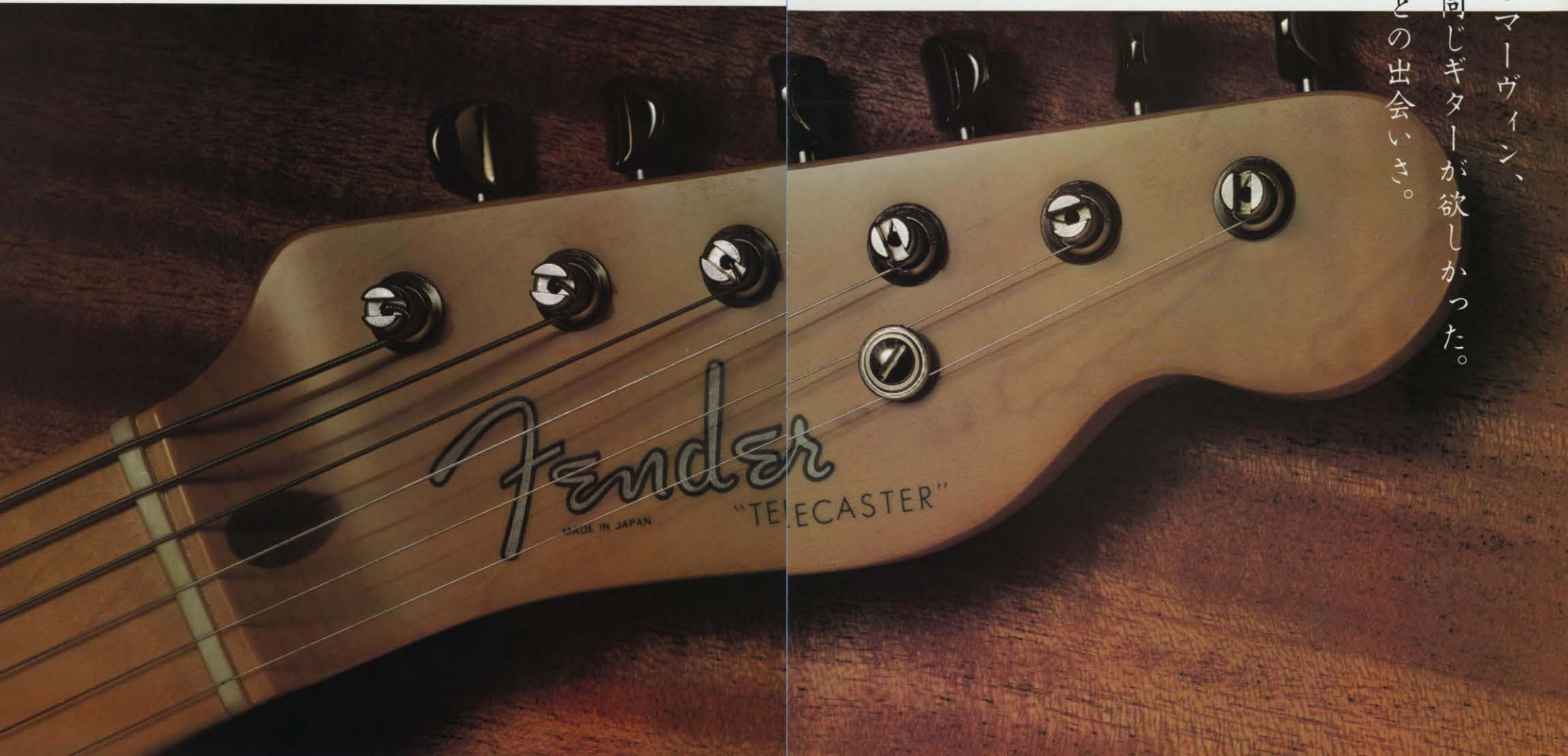
PRECISION

VALUE



V I N T A G E F E N D E R

シャドウズのハンク・マーヴィン、
彼が使っているのと同じギターが欲しかった。
それが、フェンダーとの出会いさ。



いちばん新しいテリーは、
いちばん古いテリーだ。



TL'52 TELECASTER

流行にかかわらず「ギタリスト」と呼ばれる人に
抱かれてきた。
ヴィンテージテレキャスター、TL'52。

TELECASTER

1948年、最初のソリッドボディ・エレクトリックギターがデビューした。ブロードキャスター(1950年にテレキャスターという名に変更された)である。この革命的ギターは当時のギターづくりの概念や本筋といった伝統的な約束をたためることなく破った、最初のギターでもある。シンプルで洗練されたサイドカッタウェイのアッシュボディに、4本のネジで取付けられた!!メイプルネック、しかもフレットが直接ネックに打込まれている。弦はボディの裏側から通し、ブリッジプレート—ブリッジ—ナット—糸巻へ

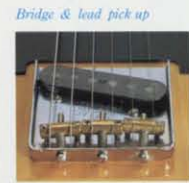


とタイトにセットされ、不要な振動を防いでいる。印象的な片側に糸巻をレイアウトしたヘッドストック、ダイヤルチャブルネック、強烈なシングルコイルトーン等々テレキャスターの合理的な構造と実用的なスタイル、特徴的なサウンドキャラクターといったプロフィールが「新しい標準」を生んだのである。ショッキングなテレキャスターのデビューを待っていたかのように、音楽の価値感を変えたロックンロールが出現したのは、その数年後だ。多分、それは、テレキャスター以前のギターづくりがミュージシャンあがりのエンジニアによって拓かれていたのに対し、テレキャスターはギタリストではないが、とても進歩的に伝統的な常識に捕われぬ「自由な意識」を持ったレオ・フェンダーの手によって具現されたからだろう。

TL'52-95 ¥95,000
4分の1世紀にわたって、ギタリストにこよなく愛され、ソリッドギターの原点に立つ'52年テレキャスターをあまりよやくなく輝かせる仕上げのバタースコッチブロード、少しワ

ックスをかけたピックアップ、光をのみこんだブラックファイバーの光沢、優美このうえないメイプルワンピースネック、2つのピックアップを有効に使ったスタンダードな配線に改めた以外、素材からデザインまで1952年テレキャスターのまま。

TL'52-65 ¥65,000
通がこよなく愛し、弾き難いきたソリッドギター、随所にオリジナルを彷彿するマテリアルを使い、クラシカル'52年テレキャスターを忠実にレプリカイト。切れのよいハイトーンと深い味わいの中域を誇る強力なTLヴィンテージピックアップを2個マウント。個性的なタロンシャンヘッドのメイプルワンピースネック、アッシュボディにベークライトのピックガード、ドーム型ノブ。淡く光をたたえるバタースコッチブロードとスタンダードなブロードカラーが用意されている。



Bridge & lead pickup
画期的なブリッジ/テールピースにマウントされたリードピックアップ。3つのスクリューでフローティングされ、弦のバランスに対応できるより自由に高さや角度の調整ができる。また、プラスのブリッジサドルとフラットなポールピースマグネットを使ったピックアップも'52年テリーならではの特徴だ。

Form
レオ・フェンダーがギタリストだったとしたら、ここまで大胆で合理的で実用的なギターは設計できなかっただろう。テレキャスターのシンプルなフォルムと時代を超えたサウンドは、セオリーに捕われず現実を厳しく見つめたレオの良心がカタチになったものだからだろう。テレキャスターを弾くアーティストに僕たちは一目を置く。

Headstock



片側に糸巻をレイアウトした、個性的なヘッドストック。胸をときめかすFENDERとTELECASTERのデカル。オールド・フェンダーを継承できるのは、フェンダー自身なのである。

Rhythm pickup



強烈でソリッドなテリーサウンドを世界に知らしめたテレキャスターのシングルコイルピックアップ。オープンタイプのリードピックアップに対し、リップスティックのキャップを連想するユニークなカバータイプのリズムピックアップ。高さや角度の調節はピックガードを外して行う。

Neck & Fretboard

ネックと指板が日本の木からなる。つまりメイプルワンピースネック。メイプル指板のフィンガリングはエボニーやローズウッドのそれとは根本的に違う。弾き込むほどにフレットボードにその証が現れる。ロイ・キヤナンのテリーに代表される、絶世のピッキング/ハーモニックやシヤキヤとしたトーンのバックキンはメイプルフレットボードならではのものだ。

Switching & Knob



'52年テリーを語る時、ポインターなしのトロッとしたドーム型コントロールノブと3ポジションスイッチのノブも見落さない。TL'52-95、TL'52-65とも2つのピックアップを効果的に使ったリード/リード+リズム/リズムの切替えに改良してある。



TL'52-95 ¥95,000
Body=ソリッドアッシュボディ
Neck=1ピースハードメイプルネック
Fretboard=メイプル指板
Pickup=ヴィンテージPU×2(U.S.A.)
Pickguard=ファイバーブラック(U.S.A.)
Controls=1891ヌーム、11トーン(U.S.A.)
Switching=リード/リード+リズム/リズム
Finish=クッカー仕上げ
Color=BSB/BLD

TL'52-95BSB



TL'52-65 ¥65,000
Body=ソリッドアッシュボディ
Neck=1ピースハードメイプルネック
Fretboard=メイプル指板
Pickup=ヴィンテージPU×2
Pickguard=ベークライトブラック
Controls=1891ヌーム、11トーン
Switching=リード/リード+リズム/リズム
Finish=ポリエステル仕上げ
Color=BLD/BSB

TL'52-65BLD



弾く人も、聴く人も、酔う。

ST'57 STRATOCASTER

「ロックンロール」というニューウェイブを目標し、体験したストラトキャスター。名器メイプルネックの'57年ヴァージョン、ST'57。

'57 STRATOCASTER

1953年、レオ・フェンダーはハイウェイ生まれのミュージシャン/エンジニアに、新しい着想に基づいたギターの製作を命じた。そのアイデアは「革命的」という形容詞にあふれていた。弾きやすくてモダンなボディスタイル、3つのピックアップをマウントし、3種類のトーンキャラクターが得られる。正確なチューニングをキープし、ボディと一体化したトレモユニットを装備する。この基本アイデアを入社したばかりのハワイアン・エンジニアは見事に具体化した。ラフ・スケッチから一年、レオが期待した以上のギターを完成させたのだ。楽器革命のみならず、音楽革命までも起こす源となった名器、ストラトキャスターである。そして、このハワイアン・エンジニアこそ、プレジジョン・ベース、ジャズベースを始めとするギター、アンプなど1953年以降のフェンダー黄金時代を築いた男、若き日のフレディ・バレスである。



ボディと一体となったシンクロナイズドトレモロは、まさしく革命そのものであった。ギタリストは手にするたびに新しい発見をした。3ピックアップのサウンドパリエーションがアンサンブルをよりモダンにし、弾きやすいコンタクトボディデザインが新しい演奏スタイルを生んだ。ストラトキャスターは深遠な魅力を持つギターだ。だから、ギタリストはストラトを弾く。ロックンロールの歴史に、自分の名を刻むために。

ST'57-115 ¥115,000

ソリッドボディ・エレクトリックギターの一のすべてを知りつついるフェンダーが、いっさいの愚見を断らざりアーチストとコレクターの夢を凝縮した'57年ストラトキャスターの完全レプリカ。小さなクロウシヤ

ヘッド、あめ色のメイプルネック、鉄材を使った特徴的なブリッジ、そしてシンクロナイズドトレモロ。信じられないほどの磁力を持ったST'57-85のピックアップ(U.S.A.)を搭載し完成した'57年ストラトの最高峰モデル。

ST'57-85 ¥85,000

オールド・ストラトに付きまとうもっさりした音に終止符を打つ。ST'57-85、オリジナルストラトキャスターの写真を十分に検討し、完璧に仕上げた傑作だ。注意深くディテールをチェックしてもらいたい。ラッカー仕上げのアルダーボディ。厳選されたハードメイプルのネック、鉄材を使った味のあるブリッジアセンブリー、トレモロアームの角度、ピックアップ(U.S.A.)のポールピース形状などのマテリアルとフォルム、そして特有のスクランブルトーン。すべてに感動を覚える'57年ヴァンテージ、ST'57-85。

ST'57-65 ¥65,000

ストラトキャスターの歴史は、またロックンロールの歴史でもある。画期的な3ピックアップ、印象的な体にフィットするコンタクトボディ。そしてシンクロナイズドトレモロ。メイプルネックのストラトを弾くギタリストの名をあげれば足りない。エレキピックアップのシンボルとして弾き継がれてきたストラトの見事な'57年ヴァージョン、ST'57-65。ギタリストを魅了しつづける名器のレプリカだ。代表的なタバコブラウンサンバースト、ヴァンテージホワイト、ブラック、キャンディアップルレッド、ファイエスタレッドの5色。

Contoured Body



弾きやすいギターとは、ギタリストと一体になれるギターのことだ。それはバランスのとれたギターのことである。ソリッドギターが出現す

る以前のギターづくりには、弾きやすさという工夫は皆無に近く、ましてやボディをカットしたりすることは及びもつかない「ご法度」であった。フェンダーはソリッドなストラトボディを生かし、ギタリストの体に当たる部分をためらうことなくカットした。これがオフセットコンタクトボディ、ストラトのフォルムを語るのに欠かせない注目すべき特徴である。アルダーボディの右脇腹と右腕が当たる部分をザックリとカットしたコンタクトボディ、体感できるアイデアだ。

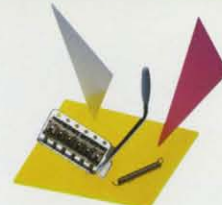
Pickup



ストラトキャスターほど応用のきくギターはない。ジャズっぽいトーンからブルース、メタリックなハードゲイストーションまで、ストラトは音楽ジャンルをまたぐ選ばない。これはピックアップの優れた特性による。ところが大きい。その特性とは、強烈なパワーとアタリのあるトーンのことだ。「枯れたトーン」とも言われている硬すぎず甘すぎず、よく響いたトーンだ。ヴァンテージシリーズのストラトは全モデルにこの、純正U.S.A.フェンダーピックアップ(ヴァンテージPU)をマウントしている。

1弦から6弦までのバランス構成を追究したアンイブニングポールピース、ターン数に変化を持たせたコイル、オフホワイトのカバー、倍音の位置を研究し、レイアウトされたリズム&ミドルピックアップ。激妙なストリングニュアンスまでピックアップする角度のついたリード

ボディにマウントし、フェンダー自身の手でオールドストラトを極めたのだ。



ST'57-115 ¥115,000
Body=ソリッドアルダーコンタクトボディ
Neck=1ピースハードメイプルネック
Fretboard=メイプル指板
Pickup=ヴァンテージPU×3(U.S.A.)
Pickguard=1ピースホワイト(U.S.A.)
Controls=1ポリューム、2トーン
Switching=リード/ビーム/リズム
Finish=ラッカー仕上げ
Color=T/BLK/VWH/CAR/FRD



ST'57-115T



ST'57-85BLK



ST'57-65CAR

ST'57-85 ¥85,000
Body=ソリッドアルダーコンタクトボディ
Neck=1ピースハードメイプルネック
Fretboard=メイプル指板
Pickup=ヴァンテージPU×3(U.S.A.)
Pickguard=1ピースホワイト
Controls=1ポリューム、2トーン
Switching=リード/ビーム/リズム
Finish=ラッカー仕上げ
Color=T/BLK/VWH/CAR/FRD

ST'57-65 ¥65,000
Body=ソリッドアルダーコンタクトボディ
Neck=1ピースハードメイプルネック
Fretboard=メイプル指板
Pickup=ヴァンテージPU×3(U.S.A.)
Pickguard=1ピースホワイト
Controls=1ポリューム、2トーン
Switching=リード/ビーム/リズム
Finish=ラッカー仕上げ
Color=T/BLK/VWH/CAR/FRD

食事をしたら、つづきを演ろう。と、ジミ。



ST'62 STRATOCASTER

ジミ・ヘンドリックスに抱かれたストラトと言えば、説明はいらないだろう。ローズウッド指板のストラト、'62年ヴァージョン。

'62 STRATOCASTER

'60年代の幕を切って落したのは、50'Sロックンロールを発展させたヴェンチャーズやビーチボーイズに代表される「サーフミュージック」である。エレクトリック色の強い、気持ちいい軽快でポップなサウンドが若者たちを創出し、またたく間に圧倒してゆく。抑えのきかない時代のエネルギーの中で、ストラトキヤスターは最初の大きな改良を行った。ローズフレットボード、別名「ローズネックストラト」と呼ばれる60年モデルである。メイプル指板ストラトとはトーンやフィンガリングニュアンスが異なるローズネックストラトは、パワーアップされ進化をつづけるアンプや登場したのサウンドエフェクターと呼吸を合わせ、ギタリストの期待に見事に応えた。

なかでもシンクロナイズドレモロに魂を吹きこみ、ストラトの持つ無



尽蔵な可能性の一端を示した。天才、ジミ・ヘンドリックスのプレイはギターの新しい奏法として、多くのギタリストたちに影響を与えた。50'Sの幕明けを飾ったテレキャスターと同じように、世の中の価値感が大きく変わろうとする波の中でストラトのマジメな魅力が、60'Sのスタートを飾ったのである。

ST'62-115 ¥115,000

あらゆる角度から'62年ストラトキヤスターを見つめ、ローズフレットボードストラトの感性を見事に表現したST'62-115。ディテールから音色の特質まで忠実にレプリカイト、ストラトに欠くことのできないアルダー材のボディ、'62年を印象づける3トーンサンバースト、3プライビクガード。そしてローズウッド指板のタイトなトーンとスムーズなフィンガリング。世界のローズネッ

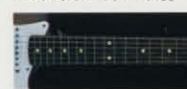
ク・ストラトフリークに捧げたい、'62年ストラトの最高機。

ST'62-85 ¥85,000

'60年代を象徴するストラトキヤスターが、このローズ指板メイプルネックの'62年ストラトST'62-85。見事なレスポンス、ローズネック特有の滑らかな感触とアルダーボディにカラーリングされた3トーンサンバーストの音色。ほどよく乾いた音色。ローズネックストラトに魅せられたすべてのギタリストはギターマニアに捧げたい、究極のレプリカ。ゴールドエンブレジギターの代表機。ST'62-85。カラフルなキャンディアップルレッドをはじめ、カラーパリエーションは15色。

ST'62-65 ¥65,000

スムーズなフィンガリング。体にピタッとくまるコンタクトボディデザイン。シャープなトーンキャラクターとシンクロナイズドレモロの絶妙なコンビネーション。天才、ジミ・ヘンドリックスのプログレッシブなパフォーマンスを体験し、聴衆を魅了させたギター。'62年ストラトキヤスター。20年前の鋭い感性をあますところなく再現し、次代のギタリストに贈るヴィンテージストラトキヤスター。ST'62-65。



'62年まではフラット貼りだったが'63年以降は薄いつラウンド貼りに変更されている。ヴィンテージストラト'62年モデルは、オリジナルのフ



ラット貼りを採用。フレット目いっばいまでたっぷりプレイできるフェンダーならではのフレッチングが、プレイに鋭く反応する。

Synchronized Tremolo

ストラトキヤスターのトレモロユニットの出現は、まさに「革命的」であった。このビルインユニットはブリッ



ジとテイルピースを一体化し、トレモロブロック全体が6本のスクリューを支点に上下動作する機構が特徴である。ユニットはこの6本のスクリューを支点に浮いており、フローティング（テンション）の度合は15本のスプリングを増減させることで簡単に変えることができる。取り外しのできるトレモロアームは、ブルとダウンのアーミングをストレートに弦に伝え、鋭く反応する。チューニングの狂いが少ないことなることながら、ワイドな音程変化が得られるのもこのシンクロナイズドレモロの魅力だ。鉄板をベンドさせた味のあるブリッジサドルをはじめ、小指でキープできるトレモロアーム、オールド特有のブロック形状など、オリジナルのエッセンスをあますところなく吸収し、入念につりあげた「シンクロナイズドレモロ」。



初期のストラトに付属されていたシンクロナイズドレモロの取扱説明書。



ST'62-115 ¥115,000
Body=ソリッド・アルダー・コンタクトボディ
Neck=1ピース・ハードメイプルネック
Fretboard=ローズウッド指板
Pickup=ヴィンテージPU×3(U.S.A.)
Pickguard=3ピース・ホワイト(U.S.A.)
Controls=1ボリューム、2トーン
Switching=リード、リドル/リズム
Finish=ラッカー仕上げ
Color=3TS / BLK / VWH / CAR / FRD

ST'62-115 3TS
Body=ソリッド・アルダー・コンタクトボディ
Neck=1ピース・ハードメイプルネック
Fretboard=ローズウッド指板
Pickup=ヴィンテージPU×3(U.S.A.)
Pickguard=3ピース・ホワイト(U.S.A.)
Controls=1ボリューム、2トーン
Switching=リード、リドル/リズム
Finish=ラッカー仕上げ
Color=3TS / BLK / VWH / CAR / FRD

ST'62-85 VWH
Body=ソリッド・アルダー・コンタクトボディ
Neck=1ピース・ハードメイプルネック
Fretboard=ローズウッド指板
Pickup=ヴィンテージPU×3(U.S.A.)
Pickguard=3ピース・ホワイト(U.S.A.)
Controls=1ボリューム、2トーン
Switching=リード、リドル/リズム
Finish=ラッカー仕上げ
Color=3TS / BLK / VWH / CAR / FRD

ST'62-65 ¥65,000
Body=ソリッド・アルダー・コンタクトボディ
Neck=1ピース・ハードメイプルネック
Fretboard=ローズウッド指板
Pickup=ヴィンテージPU×3(U.S.A.)
Pickguard=3ピース・ホワイト(U.S.A.)
Controls=1ボリューム、2トーン
Switching=リード、リドル/リズム
Finish=ラッカー仕上げ
Color=3TS / BLK / VWH / CAR / FRD

ST'62-85 ¥85,000
Body=ソリッド・アルダー・コンタクトボディ
Neck=1ピース・ハードメイプルネック
Fretboard=ローズウッド指板
Pickup=ヴィンテージPU×3(U.S.A.)
Pickguard=3ピース・ホワイト(U.S.A.)
Controls=1ボリューム、2トーン
Switching=リード、リドル/リズム
Finish=ラッカー仕上げ
Color=3TS / BLK / VWH / CAR / FRD

BALLAD

1948

STUDENT STEEL
GUITAR & AMPLIFIER
SET



1948年、レオ・フェンダーが「ブロードキャスター」を世に送り出した年である。そしてそれは、ソリッド・エレクトリック・ギターの世界に於ける「紀元」とも言っても過言ではないだろう。

もちろん、それまでもエレクトリック・ギターのソリッド化という事は何人かの人々によって試みられてはいた。しかし、今から30数年も前のこと、楽器に対する認識も違ったことだろうか。それらに対する評価もまた異なるものだったようだ。そんな状況の中で、レオ・フェンダーはソリッドのエレクトリックギターを商品化したのだ。これを「革命」と言わずして何と言おう。そのデビューが「革命」だったと同時に、このギターには随所にレオ・フェンダーの革新的なアイデアが盛り込まれていた。

さうまでもなく、ソリッドのボディはアッシュのワンピース。これによって、それまでのホロウボディのエレクトリック・ギターにつきもどったハカリ割れをカットすることに成功したのである。そして、メイプルワンピースネックが4本のスケルトンによってボディとポイントされるという、ザコッチャップル方式のネックジョイント。チューニングの便宜を考慮してペグを片側一列に配した、ユニークなデザインのカロケーションヘッド。

高音弦と低音弦のバランスを考慮して、角度をつけて取り付けられたリードピックアップと、カバードタイプのリズムピックアップという2ピックアップス。

しかし、このギター的设计思想は革新的なだけではなかった。Vシェイプのネック断面は、ジャズプレイヤーにも使ってもらえるよう、ジャズ・ギターのグリップにならったものだし、ユニークなピックアップアッセンブリー（ピックアップ・セクター）のリアポジションでリードピックアップ、セクターでストレートなリズムピックアップ、フロントでコンデンサーを通してハイカットしたリズムピックアップに、ハイカットしたリズムピックアップという甘いトーンが得られるポジションを設けた理由も、やはりジャズプレイヤーの使用ということを念頭においた結果だ。

このように、幅広く使える楽器を目指していたということも見逃すことはできない。さて、話が前後するが、ブロードキャスター発表に至るまでのレオ・フェンダーの歩みについても軽く触れておこう。

サラリーマンとして働いていたこともある彼だが、大恐慌のおおりに失業した後、細々とラジオの修理などを始め、1930年には小さいながらもラジオ店を持つに至った。やがて、ハイアンプ・ミュージックのブームが訪れ、彼の店にもスチール・ギターの修理などが持ち込まれるようになった。この、スチール・ギターとの出会いが後

ポリ・ユーム 弾法

アタック音を出さないで弾くと、そこからバイオリン奏法とも呼ばれる。ポリ・ユームを0にした状態で、ピッキングして、右手の小指でポリ・ユームを上げてやる。これを一言一言について行うわけだ。つまり、小指は常にポリ・ユーム・ソフをキープし、音を上げなければならない。その点、ストロークと異なる。

ごく自然に小指が来る位置にアレイ・スタンプされているので、非常に都合が良いのである。

ドナルド・ダック・ダン

60年代リズム&ブルース史に於いて、おもしろいのは、ダックを担当したMG'sのペーシスト。非常にリアルなアレンジから、繰り出す重厚なアレンジメントは、アンサンブルを基調としたR&Bのバックには、最適なものであった。

アラン・ホールズ・ワイス 奏法

驚異の速弾きギタリストとして知られる彼だが、シンクロイスト・リズムを使っている。アーミー・テックも独特のものだ。アレックスの中核に込められているアーミング・サウンドは、アッパは不思議なセンスを生み出し、彼特有のシンクロイスト・リズムを奏法として、彼のギター奏法とは一線を画したものである。

アット・オブ・フェイス・サウンド

かなり昔からブルース・ギタリスト達の間などでは知られていたのだが、日本でも有名になったのは、やはりエリック・クラプトンの使用にともなう。アット・オブ・フェイス・サウンドは、あるいはリズム・ミドルの中間点にセブンス・コードを挿入して、再入れられる独特の音色のことである。

タイム・ボガード

一世を風靡したブルー・ジャズ・バンド・バック・ボガード&アピスのベース奏者。バックのギター、アピスのドラムに絡みつくような強烈なインタープレイはジャック・ブルースのプレイと並び称される。先進的なサウンドクリエイターでもあり、ディストーションを効かせたベース・サウンドが特徴で、ソロ・プレイ時にはフィードバックも聴かせた。

G

W

T

スティーブ・ハリス
ブリティッシュ・ヘヴィメタルの旗手アイアンメイデンのベーシストであると同時にリーダーでもある彼のプレイは、常にバンドのサウンドをリードしていく。3フィンガーからくり出されるスピード感溢れるリフはヘヴィメタルそのものだ。彼はアプレッションベースとフラットワウンド弦のコンビネーションにすることによって、流石なプレイながら安定した重低音を得られるようにしている。

ジョン・ポール・ジョーシズ
解放してしまったブリティッシュロックの王者レッドツェペリンを支えてきた男。同じジャズベースを使っているジャコフとは対照的に、バックグラウンド重視のプレイを主とした。一見(聴)オーソドックスなプレイの中には、隠し味的に織り込まれている。実験的なフレーズも見逃せない。

ジャコ・バストリアス

現在ウエーリー・ポートを脱退し、ソロ活動中。愛用のベースは62年のジャズベースで、彼自身の手によってフレットレスに改造されている。プレイの特徴はそのフレットレスによる、歌うようなフレーズと人間味を思わせる、すばやいセリジ。60年の171のジャズベースによる。ナチラール・ハートリックと、人工ベースを組み合わせさせたトリッキーなプレイ。加えてテラール・レイやアムステルダム・シンセ・トリなども使用して、サウンドの幅を広げている。



Ballad of the Vintage.

のブロードキャスターのアイデアへと発展することになるのである。

1940年代初期には、彼はリッケンバック社で働いていたドク・カフマンと共に「K&Fカンパニー」を創立し、スチール・ギターやアンプの製造を始める。1946年にドク・カフマンは退社してしまふが、会社は「フェンダー・エレクトリック・インストゥルメンツ・カンパニー」として再出発する。レオが、強力なパートナーとなるジョージ・フラートンと出会ったのもこの頃だ。そして、その翌年1947年、彼らはブロードキャスターを完成させたのだ。

こうした経緯を経て発表されたブロードキャスターは、レオの知り合いのランドリー・ミュージシャンたちに愛用され、有名になっていった。このブロードキャスターは12週間には5本のベースで生産されていたが、約半年後にはネーミングが変更されることになる。グレッグが同名のドラムセットを発表していたので、ドラムを避けるためというのがその理由だったようだ。そして、当時斬新だった「プレジジョン」になんて、新たに「テレキャスター」と名付けられることになる。とはいえず、1950年代中頃から徐々に行われるマイナーチェンジ以前のモデルは、ブロードキャスターと同一仕様であり、この54年までのテレキャスターが貴重なコレクターズ・アイテムとなっているわけだ。

さて、そのマイナーチェンジだが、まず54年にはなるほどワンプライのピックガードに加えて、白のワンプライのものが出来る。そして、ブリッジ・サドルがプラスチック製のものをからスチール製のものへと変更される。さらに、ピックアップもポールピースの高さが不均等なタイプのものになる。ネックブリッジも、オリジナル仕様のVシェイプから、UシェイプまたはC-ネックなどと呼ばれるタイプのものに変更される。

そして60年代に入ると、メイプル・ワンピースネックから、ローズ指板を貼り合わせたアンビー

スネックへ代わっている。ピックガードも白→黒の3プライのものになる。さらに、スウィッチノブも現在のモデルと同じようなひしがついた帽子型のものが採用されるようになる。

1951

さて、大好評を博したブロードキャスター/テレキャスターに続いて、レオ・ウェンダーたちはエレクトリック・ベースを開発したのである。1951年に発表されたこのベースは、それまでのベースの概念をくつがえすかのようなものだったが、その特徴（「本質」と呼んでも良いかも知れない）は次の2点に集約することができる。すなわち、ウッドベースの巨大なボディを連想するのが難しいほどコンパクトにまとめられ、さらにそのベースの指板にはフレットが打ち込まれていたのだ。そして、フレットによって正確な音程を生み出すという意味合いで、このベースは「プレジジョン（正確）ベース」と命名された。

ボディのサイズは持ち運びの便宜を考慮してのものだったし、ポリウレタンは他の楽器とのアンサンブル上の問題になっていざこざだ。フレットは、ギタリストがベースを兼任するのが日常茶飯事であった等、このベースは当時の音楽状況の要求を満たすべく開発されたのである。この、時代の要求とレオの天才の組み合わせにより開花した「コンプスの顔」というべきエレクトリック・ベースは、やがてそれ自身が音楽を変えていくことになるのである。当時の音楽の世界でいかにフェンダーベースが画期的だったかを語るエピソードがある。

アメリカに、ミュージシャン・ユニオン（組合）があるが、その当時の名簿を見ると、パート分類に「ピアノリスト」、「ギタリスト」などと並んで「フェンダー・ベース」という項があるのだ。このことひとつでもプレジジョンベースが新しい概念を作り出してしまったということは明白だ。先にテレキャスターの出現を「革命」と言ったが、プレジジョンベースのデビューの「革命」的要素はより強いものであったと言える。

そのプレジジョンベース、オリジナル・モデルはボディシェイプがいい、ヘッドストックといくテレキャスターの流れをくむデザインであったが、徐々にマイナー・チェンジが施される。まず54年には、その年に発表されるストラキャスターのような「コムフォート・コンタクト・ボディ」つまり、ボディエッジの厚みや体が当たる部分にカットを施したものになる。そしてピックガードは白のワンプライのものに変更、カラーもブラウンと黄色のサンバーストが標準となる。

1957

そして、1957年になると大幅なモデルチェンジが行われる。まず、それまでのシングルコイルのピックアップが、スプリット・コイルのものに変更される。そして同時に、それまで別々だったピックガードとコントロールプレートは1つにまとめられ、材質もアルミニウムに変更されている。それまでボディ・サイドにあったジャックもピックガード上にレイアウトされた。さらに、ヘッドストックも、それまでのテレキャスタータイプのものから、ストラキャスタータイプのデザインのものに変更された。その後、「59年から60年にかけて、フインガーボードがローズウッドに変更され、ピックガードもアルミのものに代わって3プライのプラスチックになるが、57年にプレジジョンベ

ースはそのスタイルを完成したと言っても良いだろう。

この当時のフェンダーの躍進は、工場規模の拡大過程からもうかがうことができる。1946年当時360スクエアフィート（従業員15名）だったのが、1949年には540スクエアフィート（同25名）、そして1954年には2000スクエアフィート（同50名）と確実に成長している。

1954

さらにその1954年には、レオ・フェンダーの良きパートナーとして有名なかのフレディ・タハレスが参加している。そして、彼を加えたフェンダーはその年、テレキャスター、プレジジョンベースに続く、画期的な楽器第4号「ギター」を発表する。言うまでもなくストラキャスターである。レオ・フェンダーの構想のもと、1951年に製作を開始されたこのギターは、フレディ・タハレスにより細かな修正を加えられ、1953年に完成し、翌54年、市場に送り出されることとなる。

3ピックアップも当時としては斬新なものであったが、このギターの魅力の焦点はやはりその「シンクロナイズド・トremolo」にある。ブリッジとテイルピースを一体化してしまっただけでネック全体が6本のスタチューを支点として動くという機構は、従来のトremoloユニットと比べ無駄な動き（ブリッジ・テイルピース間の弦の移動etc.）を極端に低減していることが、アームに加えた力をストレートに弦に伝えることができるのである。そのため、チューニングの狂いが小さいこともできる。大きな音程変化が得られるようになった。今をときめくフロイドローズのユニットも基本構造は同じであるということひとつをとっても、シンクロナイズド・トremoloの機構がシンプルでありながら優秀な1の

だということが分かる。ストラキャスターの特徴は他にもある。ミュージシャンの体にピッタリフィットするようにボディエッジにカットを施された「コムフォート・コンタクト・ボディ」。さらに、先進の3ピックアップのセレクトアーススイッチ——3ウェイ方式だが——が意外なリキックを生み出した。フロントポジションとセンターポジション、或いはリアとセンターの中間点にうまくセットすることにより、アウト・オブ・フェイズ・サウンドが得られるのである。エリク・クラブドンの使用により一躍有名になったこのサウンドが、オールド・ストラキャスターの魅力の一つになっていることは言うまでもない。

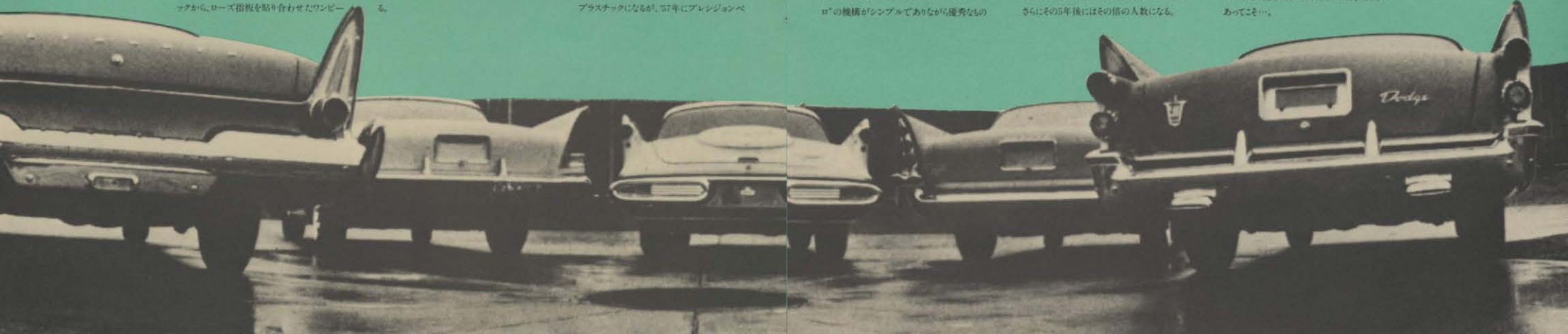
1959

さて、このギターについても他のギター同様、やはりマイナーチェンジが行われる。まず、オリジナル仕様のVシェイプのネックブリッジがUシェイプに変更される。そして1959年には、フィニッシュ・カラーのサンバーストが、ブラック・イエローのトーンから、黒にレッドが入ったトーンになる。同じ頃、ピックガードは3プライのものに替えられる。メイプルワンピースネックから、ローズ指板貼りワンピースネック全体が6本のスタチューを支点として動くという機構は、従来のトremoloユニットと比べ無駄な動き（ブリッジ・テイルピース間の弦の移動etc.）を極端に低減していることが、アームに加えた力をストレートに弦に伝えることができるのである。そのため、チューニングの狂いが小さいこともできる。大きな音程変化が得られるようになった。今をときめくフロイドローズのユニットも基本構造は同じであるということひとつをとっても、シンクロナイズド・トremoloの機構がシンプルでありながら優秀な1の

一方「フェンダー・カンパニー」は1959年には新しい建物の6,000スクエアフィートのフロアを加え、その躍進たるやすまじいものだ。名作プレジジョンベースによって、「フェンダーベース」をエレクトリックベースの代名詞にしてしまったフェンダーが、1959年に第3のベース、ジャズベースを発表する。先に紹介した3機種に比べれば、「歴史的価値」はそれほどないかも知れないが、やはり、レオ・フェンダー、フレディ・タハレスが生み出した楽器。しっかりとキャクスターを持っている。「オフセット・ウエスト」と呼ばれる、左右非対称の流れるようなデザインは57年に発表されていたジャズマスターの流れをくむもの。スリムなナロウネックは、プレジジョン製作時の「ギター感覚で弾ける」という構想をさらに一歩進め実現したものだ。

また、発表当時のコントロールがユニークだ。2つのコントロールがそれぞれ2連になっており、内側がボリューム、外側がトーンという内容で、各1個のピックアップをフォローしている。しかし、翌年には2つのコントロールによる2ボリューム、1トーンに変更されている。その内、トーンコントロールのノブだけが小さいのが特徴になっている。

さて、ここまででこの「ライオン・オブ・インテリジ」は終るわけだが、この後1965年、レオの健康上の都合により、フェンダー・カンパニーはCBSに売却されることになる。フェンダーが生み出した4機種の名機を中心に「フェンダー創世紀」というものを語ってきたわけだが、こうして振り返ってみると改めてフェンダーの業績の偉大さが分かる。テレキャスターがなければあの名器レス・ポールは出現しなかったことだろう。エレクトリック・ギター、ベースだけでなく音楽形態は生じ得なかったであろう。そして、ジムのあのアレもトラが一つあってこそ……。



MUSICIAN'S

ROCKING WITH THE SOUND OF THE FUTURE
THE HISTORY OF MUSIC
THE HISTORY OF MUSIC
THE HISTORY OF MUSIC
THE HISTORY OF MUSIC
THE HISTORY OF MUSIC
THE HISTORY OF MUSIC



Randy Hansen

「ギターの歴史を辿るには、ヘンドリックスのコピーを始めたときからなんだ。普通のFenderのピックアップが好きだよ。わかるクリヤーがない音が出るし、音色がまよまよに聞こえるんだ。」



Jeff Beck
僕はフェンダーのストラトキャスターを使用しているけど、昔ギターに接してた頃によくアルバム・ジャケットにのってたギターと形がそっくりだからというの、気に入ってる理由のひとつなんだ。何だか、その頃の思い出がいつも自然に胸に刺さってくるような、しつこくなつかしい感じになってしまってる。一種が1955年のものだと、思うけど最高のギターだ。



Rory Gallagher
どうやら僕らは根っからのフェンダー・ミュージシャンらしいよ。ストラトにはメタリックな透明感があるし、デカくてファズっぽいコーティングサウンドが響くしね。それに音の伸びもフェンダーの方がいいように思えるし……。フェンダーだと後の壁にまでぶつかるような感じなんだ。



Ritchie Blackmore
21か22のときにヘンドリックスのサウンドを聴いてしまったんだ。実際のあの強烈な音が僕の底に響いてきたものだから、どうしてもあのギターが欲しくなっちゃった。フェンダー・ギターが好きなのは、自分なりの音を出すことができるからなんだ。



Steve Lukather
ストラトでは様々なアレイができる。何よりもあのアームが利点だね。それにステージで動きやすいしね。操作性もいいし。



Joe Perry
ヤクスボウのストラトにヤクスボウのテレキャスター・ネックをつけて使ってるよ。ヤクスボウだと、ピックアップの角度が違ってくるし、ナットからペグまでの弦の長さも変わってくるしね。

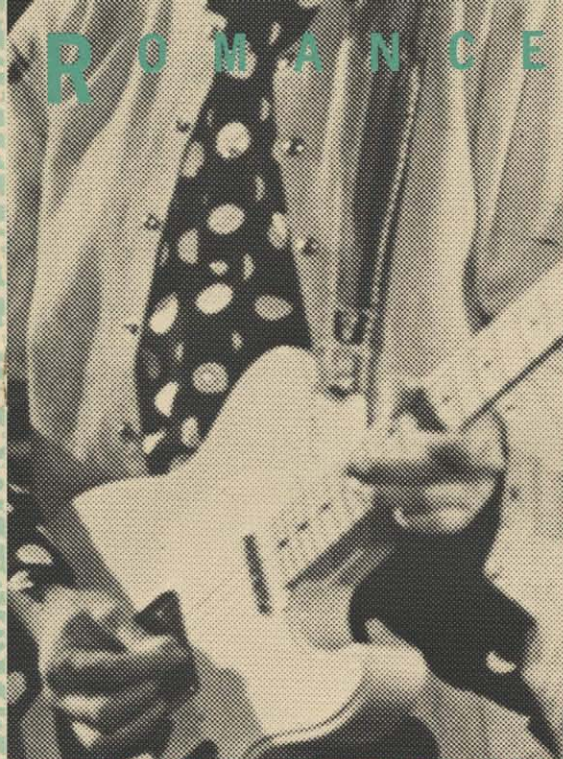


Eddie Van Halen
僕がヴィンテージストラトのセールズが好きなのは、ブラスのやつよりトーンが響きだからなんだ。ブラスは僕には向いてないみたいなんだ。どうしても思い通りのトーンが響かなくてね。



Dave Mason
シャドワーズのハンク・マーヴィン。彼が使ってるのと同じギターが欲しかったんだ。大分前の子になっちゃうけど、それがフェンダーでアレイしなくなった理由なんだよ。

ROMANCE



Eric Clapton
「ブライキーさあ、クラニーと僕が一緒に参加したころから入れたんだけど、音がすごくいいので気に入った。別に何にも手を加えてはいないけど、ただ第1PUと第2PUの間で、クォーター・トーンを出せるようにしている。そのせいでリズムとブルース的なサウンドや、ロック的なサウンドが響けるようになったよ。」



John Paul Jones
「ルイス・ハイムにここから、ジャズベースが欲しくなった。でも、それは200ドルだったと思うんだけど、新品を買ったんだ。コントロールをチューニングして1975年のギターまで使ってた。ずっと使ってたんだけど、ガタがきたから今は家に置いといてるよ。あと1952年のオリジナル・フレキシオンベースも持っているよ。スチュージオでトラック・ドッグなんかをやるときに使ってたよ。」



Roy Buchanan
「テレキャスターは、スケールよく傾けて、もうじやなかったら、テレキャスターでなくてもいいんだ。僕はこのギターは他のギターよりも響きやすいかなよりも、そのサウンドが気に入ったからね。」



Paul Kosoff
「バック・ストリート・バンドではメイプルネックのストラトを使ってる。ジャケットのやつね。すごくいい響きだね。すごく反応が良かった。「TIME AWAY」のドラックで使ったんだ。フリーの最終公演でもストラトを使ったよ。」



Andy Summers
「ストラトを音のリヴ・アップに通した音は素晴らしいし、僕のテレキャスター・カスタムをマーシャルに通した音もまた一種独特な……あれほどいい音はないよ。」



Jaco Pastorius
「フェンダーが一番だね。1967年のフレットレスにして、1960年ののをそのまま使ってる。その他にも練習用ののを3本持っているけどみんなジャズベースだ。」



Larry Carlton
「水晶のように透明な、ディストーションしていないリズム・サウンドが必要だと思うところ、自分のヴォーカルの裏にストラトを弾いてる自分が見えるんだよ。」





「フェンダーのモデルにも
ひょうふたを飲みながら、もう一度ワグネルが
「ギター」は、これこそが、また、フェンダー

フェンダーベース求む

ブレッシュベースの出現が巻き起こした珍事は多いが、中でも、ミニリジションエオンのカテゴリーの中に、エレクトリックベースではなく「コブエターベース」という職種が加えられたことは、この大きさを語るのにもついでに例である。つまり、エレクトリックベースと言えは、フェンダー・ブレッシュベースのことであり、また、ウッドベースはまよならを言って、エレクトリックベースに弾きかえるミニリジションが、いかに多かったか。

「フェンダーベース、でなくては、ベースでは無い」といった風潮もあったようで、バンドでツアーを組む場合も、正確でハバロなサウンドと、簡単に移動できるコンパクトなサイズのブレッシュを持っていたことが、条件になっていたバンドもあったくらいだ。

テリィとストラトは兄弟なのだ

テレキスタの成功によって、エレクトリックベースの製作が始まった。一九五二年、ブレッシュベースが登場する。五年、ブレッシュは、テレキスタをそのままスケールアップしたスタイルで、例えば、ボディやヘッドストックのスタイル、木素材、ピックアップ構造などを見ると明らかにテレキスタからいただいたという感じがする。

このギターもやはりテレキスタの一部をいただいている。信じられないかもしれないが、ボディ形状が基本的に同じなのだ。テレキスタとストラトキスタのボディ図面を重ねると、テール側からウエストのあたりにかけて、まったく同サイズ、同曲線なのである。

ボディにウエストカットをした見事なストラトのコンタクトボディの線が顕著する、マジックなのである。

叩いて、削って、直せ

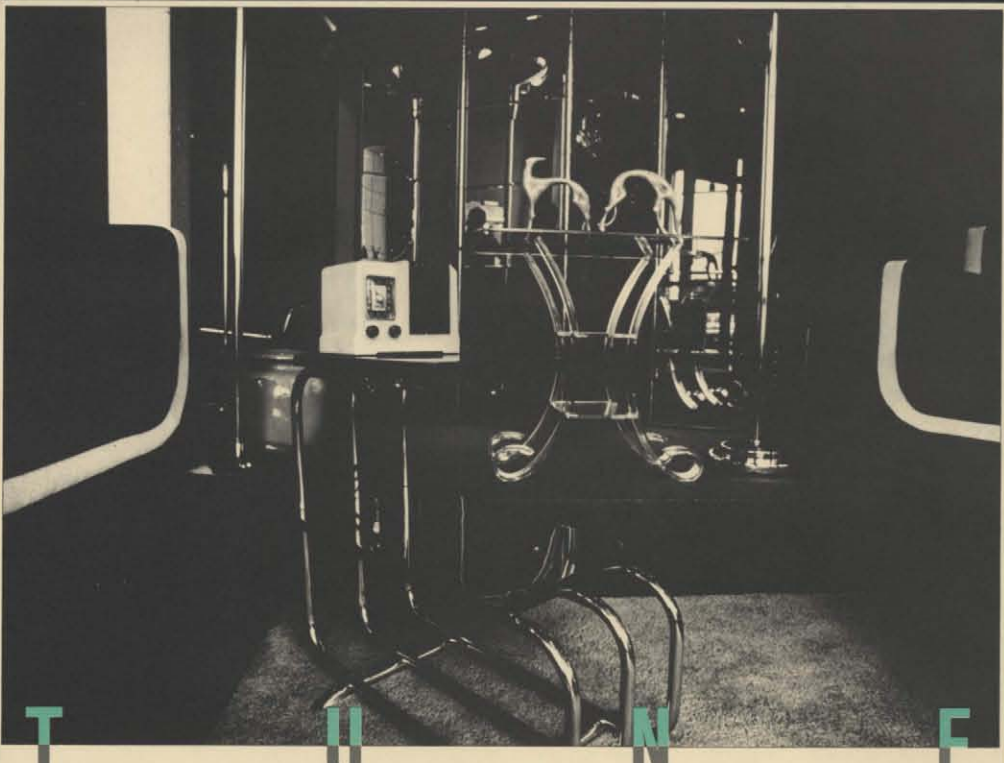
オールドフェンダーの製作年を割り出す方法はいろいろあるけれど、次の方法がポピュラーだ。その①
1948/49年のプロドキスタならば、3ケタの数字がブリッジプレートに刻まれている。1950/54年のテレキスタとブレッシュベースは3ケタか4ケタの数字がブリッジプレートにスタンプされている。
1953/54年のストラトキスタは、4ケタの数字がネックのジョイントプレートに入っている。1955/56年の全機種とも、4ケタの数字がネックジョイントプレートに入っている。

②
1957/60年は5ケタの数字が、1960/64年は15ケタの数字がネックジョイントプレートに入っている。

③
色、形、振った感じ、弾いた感じで割り出す。その①は誰にでも出来、よく知られているが、その②の方は十分な経験と確かな目が必要なので、いわゆる「通」にならないとダメだと思ふ。

しかし、例え「通」であっても鑑定に1~2年の差が出る「E」がある。これは楽器自体のバラツキによる誤りで、しばしば鑑定する人を悩ませます。現在のようには、マフロッタシオン・システムが整っていない中で作られた初期のフェンダーは、同じモデルでも作業する人のタッチで仕上がりが違っていた。三角ネックのつもりでも、ロネックのようになつたり、ボディ形状やペダルの位置、コントロールパネルの各パーツの材質など、感覚と感性、臨機応変なラフトワークが「百本全部が同じもの」を作らなかつたのだ。

「叩いて、削って、直せ」という職人芸が生んだ、昔れるバラツキなのである。



カントリーも好き、ジャズも好き

オリジナルのテレキスタ（プロドキスタ）の配線がコンテナーを使った直線変化に特徴があることは、よく知られている。しかし、この配線が初期のテレキスタ（三角ネック同様、当時のポピュラーミュージックの演奏スタイルやサウンドに合わせた苦心のワイヤリングであった、という事実を知る人は少ない。

オリジナルのワイヤリングは、スイッチをリード側（ブリッジ側）にするとシキキのカントリー&ウエスタンになり、センターポジションでフロント側（リズムピックアップ）のノーマルなトーン、そしてフロントポジションでリズムピックアップの高域を抑えた甘くソフトなジャズトーンに切替わる。

シキキカリストが簡単に親指で五、六弦がおさえられるようにと、ネック形状を三角形にしたように、カントリー&ウエスタンキスタはもちろん、ジャズキスタにも享受できるコンパクトリックギターを、と考えられたスイッチングなのだ。

もっと自由にギターをつくろう

テレキスタとストラトのボディの輪郭は同じである。

つまり、プロトタイプのストラトはテレキスタのように、エッジが角ばっていた。

じゃ、ストラトのコンタクトボディを考えたのは誰なのだろう。

一九五三年、レオ・フィンダーと、主任設計師のフレディ・タバレスは、ストラトキスタのプロ

トタイプを、工場に入入りするギタリスト達に試奏させ、意見を聞き、完成へと一歩ずつ近づいていた。そんな時、よく工場へやってくるレックス・ギキリオというギタリストが面白いことを言った。そもそもレオのギターは、「板切れにピックアップを付けて、弦を張ったギターだ。

最初から、すべて自由なんだ。どーだい、いっそのこの腹と肘のあたる部分を削って、弾きやすくしたら。」

ストラトのコンタクトボディは、彼のひと言で決まった。いいことだと思つたら、すぐ実行する。フェンダーのポリシーを語るエピソードである。

黄金の王子

ストラトキスタは一九五四年に登場した。しかし、アイデアそのものは、九四〇年代からあった。

完成までに五年以上の年数を費した理由は、テーマがあまりにも大きく、ひとつひとつのコンセプトをうめるのに時間がかつたからである。

プロトタイプが陽の目を見るのは、一九五三年、フレディ・タバレスがフェンダーに参加する時まで持たなくてはならない。

「入社したての私に、ラフな図や几帳面に書かれたコメントがまたメモを持ってきて、「こんなギターをつくってくれ、ってレオは言った。仲のいい友人が、面白い計画をたてる時の感じでね。メモを見た時、なかなかかえない玉子、それも黄金の王子だつて思ったね」とフレディは当時を振り返る。



アマチュアだった頃から、フェンダーだった。

F E N D E R I A N

ALBERT LEE



STEVE LUKATHER
TOTO



DONALD 'DUCK' DUNN



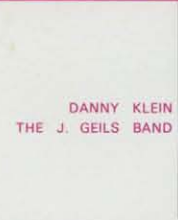
STEVE CROPPER



DAVID HUNGATE



BONNIE RAITT



DANNY KLEIN
THE J. GEILS BAND



ROBIN TROWER



TIM BOGERT



NANCY WILSON
HEART



RORY GALLAGHER



RITCHIE BLACKMORE



ERIC CLAPTON



CHRISSIE HYNDE
PRETENDERS



JIM MESSINA



DAVE MASON



KEVIN CRONIN
REO SPEEDWAGON



ROY BUCHANAN

最初のミスター・ベースマン。



PB'57 PRECISION BASS

エレクトリックベースの象徴、プレジジョンベース。
コレクターズ・アイテムのトップにリストされる
'57年ヴァージョン、PB'57。

PRECISION BASS

プレジジョンベースはテレキャスターの成功によって具体化され、いっしょにまとめあげられたのである。したがって、最初のプレジジョンベース（1951年）はサイズもデザインもテレキャスターをひと回り大きくしたスタイルで、現在のテレキャスターベースに近いフォームをしていた。しかし、巨大なウッドベースにコンタクトピックアップを付け、ハウリングに悩まされながら演奏していたベーシストにとっては、まさに神様からの贈物以外のなにもでもな



かった。コンパクトだからケースに納めてどこにでも気軽にツアードできる。音量だってウッドベースの比ではないし、なによりもフレットが打ち込まれているので音程が正確だ。1957年、プレジジョンベースは大幅なモデルチェンジを行う。ストラトキャスターの流れを受けたコンタクトボディ（1954年に改良）を生かし、それまでのシングルコイルピックアップに代わって、性能機能とも非の打ちどころのない「スプリットピックアップ」がマウントされ、ヘッドも大きくなり、ピックガードとコントロールプレートが一体化され、素材もアルミニウムを焼付けたものに変更された。この'57年プレジジョンベースのエッセンスは、今日のあらゆるエレクトリックベースの種所に生かされている。それは、1957年にエレクトリックベースは完成したということの証なのである。

PB'57-95 ¥95,000
エレクトリックベースといえば、フェンダーベースのこと。そして音楽史に足跡を残す最初のエレクトリック

ベースがこのプレジジョンベース。アルダーウッドボディ、ラッカー仕上げの2トーンサンバースト。特徴のあるアルミ焼付ピックガード、フラットなメイプルワンピースネック、などどトラッドなディテールとこだわった重低音に注目していただきたい。'57年プレジジョンベースそのままの音色と容姿を再現した。PB'57-95。

PB'57-70 ¥70,000

最初のソリッドボディエレクトリックベースとして讃えられ、いつの時代も栄光のミュージックシーンに選ばれてきた、プレジジョン。'50年代ならではアトミックシェイプを生かした機能的なボディ、ロックンローラーを震撼させる力強いタイトなトーンキャラクター、芯の一本通ったセンセーショナルなサウンドとトラッドな容姿が見事に融合した名器PB'57-70。誇り高きベーシストに捧げたいエレクトリックベースのオリジン。

Pickup

'57年プレジジョンベースの基調こそ、このスプリットピックアップ。1、2弦側と3、4弦側にシングルコイルピックアップをスプリット（分け）したスタイルで、各弦に対し2つのポールピースが装備されている。弦振動が磁界から外れることなく、確実なピックアップされる。ピックアップ自体の高低・傾斜調整も低音弦側と高音弦側別々に行うことができる。ヴインターゼジPBのスプリット



ピックアップは、形状はもちろんのこと、コイル、コイルベース、ポールピースに用いる素材にまで神経を集中、（当時のパーツメーカーを捜し出して再生産している）忠実にワインディングしている。音質は重厚で、ひとつひとつの音に緊張感があり、しかもドライだ。PB'57-95はPB'62-98にはフェンダー純正ヴインターゼジピックアップを使用している。

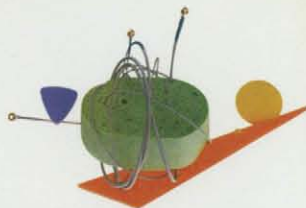
Pickguard

'57年プレジジョンベースの特色のひとつにピックガードがあげられる。ピックアップ、コントローラー、ジャックがアルミ焼付塗装の流いピックガードと一体になっている（PB'57-95）。これはストラトキャスターから派生した「機能性」を取り入れたもので、タバコブラウンサンバーストのヴインターゼジと織り成す雰囲気は独特な味わいになって、アーティストの心を揺動かす。PB'57-70にはオフホワイトのピックガードを採用している。

Neck

'57年プレジジョンベースを含むワールドプレジジョンベースネックはワイドなネックが特徴となっている。ネック幅が1,750*もあるのだ。

これは、最初にプレジジョンベースを発表した当時、ウッドベースプレイヤーが十分な弾きかえれるように、ウッドベースのネック幅を基準に設計したからである。現在のエレクトリックベース奏法を考えると、ギターに近い状態のネックが理想的であり、左手の動きも俊敏にできる。ヴインターゼジプレジジョンベースは、ネックに限り現行のプレジジョンベースに近いネック幅ラ



PB'57-95 ¥95,000
Body=ソリッド・アルダー・コンタクトボディ
Neck=1ピース・メイプル・メイプルネック
Fretboard=メイプル指板
Pickup=ヴインターゼジスプリットPU (U.S.A.)
Pickguard=アルミ焼付 (U.S.A.)
Controls=1ボリューム、1トーン (U.S.A.)
Finish=ラッカー仕上げ
Color=T・BLK/VWH/CAR/FRD



PB'57-70 ¥70,000
Body=ソリッド・アルダー・コンタクトボディ
Neck=1ピース・メイプル・メイプルネック
Fretboard=メイプル指板
Pickup=ヴインターゼジスプリットPU
Pickguard=1ピース・オフホワイト
Controls=1ボリューム、1トーン
Finish=ポリエスチル仕上げ
Color=T・BLK/VWH/CAR/FRD

ビームとは、カッコいい、ということ。



PB'62 PRECISION BASS

ロックンロールシーンを見据えた、端正なフォルム。
重厚なトーン、克明なディテール。
ローズウッド指板のプレジジョン、62年ヴァージョン。

'62 PRECISION BASS

プレジジョンベースは現在までに時代に即応した改良を漸進的に行ってきた。1951年をオリジナルヴァージョンとすると、'54年はボディのエッジにラウンドをつけ、肘と脇腹の部分に削ったコンフォート・コンタードボディ、'57年はスプリットピ



ックアップをかかえ、コントロール、ジャック、PUがピックガード上にマウントされ、ヘッドストックも大きく変わった。現在のプレジジョンはこの'57年ヴァージョンに準じている。

'59年、ローズ*フラット貼り。指板が登場する。'60年代のプレジジョンベースと言えば、このローズネットプレジジョンのことである。メイプルネックのプレジジョンとはニュアンスの異なるサウンド&トーン、そしてローズウッドのスムーズなフィンガリング、抜群のグリップ感覚。ボディカラーも3トーンサンバーストが基調になり、高級感をもたし出すベッコウ柄の4プライピックガードと調和した容姿は、ベースリストにこまなく愛され、コレクターズアイテムのトップにリストアップされている。

PB'62-98 ¥98,000

弾き継がれて20余年、'62年プレジジョンベースの最高機PB'62-98。ローズフレットボードのフラット貼りワンピースメイプルネック。ベッコウ柄のピックガードと調和した美しい3トーンサンバーストフィニッシュ、アルダーボディ、そしてデュアルコイルのPBスプリットヴィンテージピックアップ。コンのある重低音、無類の弾き応えと弾きやすさで、世界のトップベースリストに愛されてきたエレクトリックベースのキング、感覚のすべてをあげて継

承したPB'62-98。

PB'62-75 ¥75,000

滑らかなフィンガータッチを約束するローズウッドフレットボード。'62年プレジジョンベースの美しいレプソカPB'62-75。各代のベースリストをうならせたしなやかな弾き応え、すきないツリッドな重低音。そしてシンプルなフォルムに似合わない幅広い音楽性と卓越したライブ感覚。PB'62-98同様、リアリティあふれるアビレックス、ヘッドストックの「FENDER」のデカールがベースリストを直撃する、プレジジョンベースの基本モデル。



Rosewood Fretboard

厳選したローズウッドをフラット貼りした、ワンピースネック。60年代初期のプレジジョンベースを完璧に表現するため、オリジナル図面を細かくチェック。フレット形状、フレティング、ポジションマークの材質など、ネックを構成するすべてのディテールを、微妙なニュアンスまでも

見事に再現。ネックシェイプは、抜群のグリップ感と演奏性を約束するヴィンテージJシェイプを採用している。また、ヘッドストックのロゴは小粋なシルバーで、PRECISION BASSのレターとのコンビネーションがヴィンテージ感をもたしだしている。

Pickup

エレクトリックベースを代表する



PBサウンドはシングルコイルピックアップを2ユニット組合わせたスプリットピックアップで決まる。ヴィンテージPBピックアップは、ベースリストが要求するたふりとした音量、しかもビシッと締まっている重低音、を満足させる傑作。ひとつの弦に対し、2つのマグネットをセットしたこのスプリットPUは、コイル、マグネット、ボビンの各ディテールにオリジナル同様の素材を使用し、ヴィンテージ感を前面に押し出したトーンニュアンスが魅力だ。ピックアップ単体だけでも十分価値のあるユニット。

Bridge & Tailpiece

ボディにびたり、シンプルなL型プレートにテールピース。ブリッジには弦のガイドラインを刻み、ベンディングやチョッパーによる弦ぶれを防ぐ、フェンダーならではのスタ



イルブリッジ。すべてのエレクトリックベースの基本をなす、ブリッジ&テールピースアセンブリーだ。



Pickguard



62年プレジジョンのフィリングを伝えるベッコウ柄の4ピースピックガード。ブラック(BLK)、ホワイト(VWH)、キャンディアップレッド(CAR)、フィエスタレッド(FRD)は3プライのホワイトピックガードだ。



PB'62-98.3TS

Body=ソリッド・アルダー・コンタードボディ
Neck=1ピース・ハードメイプルネック
Fretboard=ローズウッド指板
Pickup=ヴィンテージ・スプリットPU (U.S.A.)
Pickguard=ベッコウ柄 (3TS/VWH)
3ピース・ホワイト (BLK/CAR/FRD)
Controls=1ボリューム、1トーン
Finish=ラッカー仕上り
Color=3TS/BLK/VWH/CAR/FRD



PB'62-75.VWH

PB'62-75 ¥75,000
Body=ソリッド・アルダー・コンタードボディ
Neck=1ピース・ハードメイプルネック
Fretboard=ローズウッド指板
Pickup=ヴィンテージ・スプリットPU
Pickguard=ベッコウ柄 (3TS/VWH)
3ピース・ホワイト (BLK/CAR/FRD)
Controls=1ボリューム、1トーン
Finish=ポリエスナル仕上り
Color=3TS/BLK/VWH/CAR/FRD



名手と呼ばれる男が弾いている。

JB'62 JAZZ BASS

ギターを弾く感覚で、ベースを弾く。
ジャズベースは20年も前にクロスオーバーしていた。
至高のエレクトリックベース、JB'62。

JAZZ BASS

プレジジョンベースの登場がどれほど鮮明であったか、当時の音楽シーンや楽器業界の盛況ぶりをふりかえらば、想像できよう。プレジジョンのデビューと成功に発売され、ほとんどのギターメーカー



がプレジジョンベースを基本にエレクトリックベースの製作を始めたのは言うまでもない。

1959年、フエンダーはプレジジョンベースを発展させ、再度「ギターを弾く感覚で弾くベース」というコンセプトのもとに、決定的なエレクトリックベースを発表する。センセーショナルな2ピックアップ装備のベース、ジャズベースである。「ギターを弾く感覚」のコンセプトを見事に具現し、ボディデザインからネック形状までフォルムの一切がベースギターを操るために考えられている。オフセット(左右非対称)のコンタドボディ、スリムなナローネックエレクトリックベースのアンチークで重々しい容姿を洗練したフォルム。ギタリストがベースを弾く、ギターを弾くような感覚で弾く。ジャズベースの出現でベースプレイヤー人口が増えたという事実が、このモデルのポピュラリティを十分に語る証である。また、ジャズベースは最初の2ピックアップ装備のエレクトリックベースでもある。コントロール部のワイヤリングも含め、'60年代以降の2ピックアップベースの「標準」とされたのは言うまでもない。

JB'62-115 ¥115,000
プレジジョンベースの各キャラクターを発展させたフォルムとサウンド。1959年に発表されたレアな2連コントロールタイプのジャズベース。体にビタッとアルダー材の

オフセットコンタドボディ、左手のテクニクを驚異的に広げるナローネック、8ポールのビースのヴィンテージJBピックアップ。繰り返りに繰り返さないフレキシブルなキャラクターがプロベシストを直撃する。JB'62-115。

JB'62-75 ¥75,000

レアな2連コントロールタイプをスタンダードな2ボリュームトーンにした'62年ジャズベースのレプリカ。JB'62-75。印象的な左右非対称のコンタドボディ、スリムなナローネック、フラットローズフレットボード、ベッコウ柄のピックガードなど美しいフォルムと緻密なディテールはオリジナルヴァージョン通り。重厚で暖のあるJBヴィンテージピックアップをマウント、プロベシスト待望のトラディショナルなJB'62-75。

Body & Neck

ジャズベースのコンセプトは「ギターを弾く感覚」である。JB'62-115とJB'62-75のボディ & ネックはこのイメージを見事に象徴したエレ



キトリックベースだ。'60年代の傑作ギター、ジャズマスターの流れをくむボディフォルムは左右非対称のオフセットウエストボディ。ストラトやPベース同様、トップの右肘部分とバックの脇腹部分にナーバーをつけたコンタドボディだ。ネックにも注目して欲しい。名高い



ナローネックは、ジャズベースに始まったもので、ギタリストの意見を加味したグリップ感覚は、新しい奏法を生んだ。ジャズベースを愛用している人たちの中にスタジオミュージシャンが多いのは、ジャンルを選ばないワ

レキシブルなトーンキャラクターとグリップ感覚の良さによる抜群の演奏性という特徴が味あえるからである。

Controls

初期のジャズベースのピックアップコントロールは、ボリュームトーンが一体となった2連コントロールが特徴である(JB'62-115)。内側がボリューム、外側がトーンコントロールで、それぞれのピックアップに対し1コントロールずつ装備されている。ボディ表面のヒヤ



ウト全体はともシンプルだ。このコントローラーもわずかな間だけで、すぐに姿を消して変わって装備されたのが現在の2ボリューム、1マスタートーンコントロールスタイルである(JB'62-75)。コントロールパネルのルックスはともシンプルだ。

Pickup

ひとつの弦に対し2つのポールピ



ースをセット。磁界を広げ、微妙な弦振動までも逃さずキャッチする。ジャズベースのピックアップは、'57年プレジジョンベースのダブルポールピベースピックアップを襲用した、スリムなシングルコイルタイプ。キャラクターに合わせ、JB'62-115には純正フエンダーヴィンテージPUを、JB'62-75にはオールドジャズベースのサウンド特性を再現したヴィンテージJBピックアップを使用し、'59年と'62年のジャズベーストーンをリアルに演出している。



JB'62-115 ¥115,000
Body=ソリッドアルダーコンタドボディ
Neck=1ピースハードメイプルネック
Fretboard=ローズのフラット
Pickup=ヴィンテージPU×2(U.S.A.)
Pickguard=ベッコウ柄(U.S.A.)
Controls=2ボリューム、2トーン(U.S.A.)
Finish=ラッカー仕上げ
Color=JTS/BLK/VWH/CAR/FRD

JB'62-115 JTS



JB'62-75 ¥75,000
Body=ソリッドアルダーコンタドボディ
Neck=1ピースハードメイプルネック
Fretboard=ローズのフラット
Pickup=ヴィンテージPU×2
Pickguard=ベッコウ柄
Controls=2ボリューム、1トーン
Finish=ポリエスチル仕上げ
Color=JTS/BLK/VWH/CAR/FRD

JB'62-75 VWH

ACCESSORIES

持っているギターが、その人のグッドテーストを奏わす。
と、言うけれど、ケースやギターコードといったアクセサリーだって見逃すわけにはいかない、アイテムなのです。

- TWEED CASE FOR GUITAR ¥33,000
- TWEED CASE FOR BASS ¥36,000



- HARD CASE FOR GUITAR ¥17,000



- HARD CASE FOR BASS ¥19,000



- SOFT CASE FOR GUITAR ¥8,500



- SOFT CASE FOR BASS ¥9,500



- NYLON SHOULDER CASE FOR GUITAR ¥9,000



- NYLON SHOULDER CASE FOR BASS ¥10,000



- PRO COORD
60cm ¥800・3m ¥1,200・5m ¥1,500
7m ¥1,800・10m ¥2,200

誇
り
を
持
つ
て
弾
け
い
た
ス
あ
の
中
へ
。

ギターは、ここで、夢を見る。

● ソフトケース

とにかく、しなやか。肩に負担のからないワイドストラップを採用したショルダーケース。ヴィンテージファウンダーのロゴが刻まれた、ジョイントブレイクがよい感じで光っている。

● ナイロンケース

洗練されたショルダーケース。素材の特長を引き出したハイテクなタイプだ。楽器やギターコードなどが十分に収納できる。たっぷりとしたスペースがうれしいね。

● ツイードケース

オイルドフェンダーケースの完全レプリカ。トウイード生地やエッジに使うカウスキンは、すべてUSAから取り寄せたもの。丈夫で、しかも味のある外装。ヴィンテージファウンダーを納めるのに一番いい雰囲気を持っているケース。

● ハードケース

ギターを休める。という意味では、しっかりした内装のハードケースが理想的。ブラックフェイスでおなじみのケース。ブラックシルバードのフェンダーブレイクもきまってるね。

TWANG

「トワング」とは、弦をはいた時のビーンという音のこと。舌で大きな鳴き声をハウハウ、と、発音するように、テケテケがあちろではトワングなのである。しかし、ロックンロールの世界では、トワングはフェンダー・トーンのことを意味する。だから、シャキシャキした、クリスタルで枯れたトーンのことを言いたければ、TWANGINGでもいいし、TWANG、TWANG でも大丈夫。

STRATOCASTER

TELECASTER

PRECISION BASS

JAZZ BASS

Fender
JAPAN



Drag racing started as a postwar teenage infatuation with souped-up cars in which speed-crazy kids raced down rural roads, some drivers to death. Now in many places, such as Santa Ana, Calif., where 2,000 and 350 contestants turned out for races held on quarter-mile strips by cars that are still



VINTAGE VIBRATIONS

VINTAGE
VIBRATIONS

FENDER JAPAN CO., LTD.
〒101 東京都千代田区神田區山崎1-4-2
TEL: 03-251-3742

●品質保証書は、本製品の保証書と別紙として発行されます。●製品の保証期間は、保証書に記載されています。●保証書は、保証書に記載されている保証期間中に限り有効です。